書評

尹光鳳『日本神道と神楽』（テハック社 2009）

尹　祥漢

１.

本書は、尹光鳳氏が研究を進めておられる「日本の神楽」の成果をまとめ、一般の人にも分かりやすく紹介したものである。著者は本書において、氏の長年にわたる研究分野である「韓国の民族演戯」の延長線上として日本の「民族演戯」を代表する「神楽」を研究し、これを通じて「本当に日本的な民族演戯は何なのか」という問いに答えようとした。

神楽とは、神が降臨する場・神座を設け、神を楽しませ、神と人とが共に享楽することで神の力を得ようとする神人和楽の神事のことで、現在では特に、神に奉納する歌舞（かぶ）を指す。かぐらという語は、神が降臨した時に身を置く場所である「神座」（かむくら・かみくら）から転じたとされ、その起源は古く『古事記に見られる「天岩戸」の故事に遡るため、日本舞踊の根源といえよう。本書は、著者自らが日本民俗学の入門書と位置付けているにもかかわらず、著者が自ら足を運び、目で経験してきた日本の神楽を紹介し、神道という上位概念からみた神楽の意味を明らかにするとともに、具体例を通じて韓国における演戯と比較検討することで、日本と韓国における演戯と信仰という本源的な問いにまで近づけようとしたものであり、入門書の領域を超えるものであると言える。

第１章では、日本の大学に赴任してから神道と神楽に学問的興味を持つようになった経緯と本書の位置づけについて説明などがなされる。続く本文は、目次では明らかにされていないが、その内容から見ると大きく分けて二部構成になっている。第一部の第２章から第６章は、神道の起源と日本植民地時代の韓国神社、日本各地の韓国系神社、神社と祭との関わり、古表神社の人形戯、日本の神楽、中国の儺戯、韓国のタルチュム（仮面劇）を比較について述べられている部分で、理論編とみることができ、神社を中心とした日本と

韓国の歴史的な関わり、東アジアにおける祭儀と演行の意味と本質について論じている。第二部の第 7 章から第 14 章は、実例編で、様々な日本の神楽の生の様子について紹介している。最後に第 15 章はまとめとして、「神楽は日本独自の芸術」という捉え方から視野を広げ、東アジア文化の産物として理解する姿勢が必要であると本書を締め括っている。以下、第 1 章と第 15 章を除いた第 2 章から第 15 章までの本文の各章の内容を敷衍してみよう。

２.

「第 2 章　神道の起源と神社」では、神道の起源と神社の建造物と装飾物、神道と仏教との関係について紹介している。注目すべきは日本植民地時代における韓国の日本神社に関して紹介した部分で、著者は侵略の手段として神社が活用(利用)されていたという事実を、事例を挙げて説明している。そして、九州の宇佐神宮が韓国からの漂着神を祭っていることを指摘し、蕃神(外国系神)が祭られている神社についても紹介している。

このような神社をめぐる日本と韓国の関係は、「第 3 章　日本の神社と韓国」においてより詳しく記される。第 3 章では、出雲大社、平野神社、新羅神社、高麗神社など日本神社に残っている韓国的な要素を探りながら日本の民俗が外来要素を収容して発展させて行く過程を分かりやすく紹介している。「第 4 章　神社と祭り」では、無病長寿への望みから始まった祭りという行事が日本人の生活にどのように位置づけされているかを紹介し、その一例として、京都八坂神社の祇園祭りが詳しく言及されている。そして、神社の芸能として行われる様々な儀式についても述べられており、これらの言説も中国や韓国といった東アジアという視野を保持している。次の「第 5 章　古表神社と人形戯」では、神社で行われる芸能について考察が行われる。中国の角抵戯が伎楽に伝承された経緯を紹介し、韓国の高麗歌謡である悼二将歌の人形劇と細男伎楽の関連性を探るという独自的な試みがなされている。

「第 6 章　原初的側面から見た祭儀と演劇」は、祭儀と演劇に対する著者の研究観がはっきりと現されている部分である。第 6 章では、演行の持つ本質的な意味を民俗学者ならではの立場から考察がなされている。そして、自らが体験した中国の儺戯から垣間見られた神楽の姿を見つけ出し、祭儀が芸

術劇へと変貌していく過程を、中国、韓国、日本の演行を通じて取り上げている。そして、「演行の構成要素である仮面と舞台(空間)にも、共同体意識を高めるための高度に計算されたものがある」との見方が提示されており、これらの装置にも、文化の差異を超えた類似点が見られることを指摘している。

「第7章　神楽の様々な形」からは、神楽に関する具体的な論議が始まる。神楽の起源や従来の神楽研究史、神楽の形成と構造など神楽についての学問的問題が言及されている。「第8章　神楽と共同体文化」では、コミュニティーの結束力を高める手段としての神楽の役割、神楽を継承することの意味や課題について記されている。ここで注目すべきは、日本の中国地方の地域によって異なる神楽の形と意味を、自然環境や地理的位置というキーワードで説明している部分である。このような結果に対し、著者は「神楽を通じて、外的要因と内的要因が互いに作用し、変化していく伝統文化が見られる」との見方を提示している。

第9章からは、神楽の様子を、中国地方を代表するいくつのもの例を取り上げて具体的に考察している。「第9章　荒神神楽」では、広島県比婆郡(現庄原市)の荒神神楽と神石郡の神代神楽が、「第10章　岩国行波の信仰と芸能」では、山口県岩国市の行波神楽が、「第11章　踊りが鮮やかな阿刀神楽」では、広島市安佐南区の阿刀神楽が、「第12章　市山神楽」では島根県邑智郡の市山神楽が、「第13章　神楽の演出空間と神話の背景」では、岡山県成羽町の備中神楽がそれぞれ取り上げられている。これらの章では、著者自らが参加・体験した中国地方の各神楽の様子が写真と共に詳しく紹介されており、神楽組織、神楽が行われるまでの準備の様子、神楽本番の模様など神楽という儀式の全過程を隈なく見ることができる。

本文最後の「第14章　厳島神社の舞台空間と芸能」では、神楽に対する具体的な説明は殆ど言及されていないが、広島県を象徴する宮島の厳島神社を芸能の舞台という観点から詳しく紹介している。

３．

以上、本書の内容を紹介したが、これらの研究は民族学や歴史学など様々な分野に貢献するものがあると予想される。ここではこれらの中から、民族学への貢献や意義に限って、何点か指摘しておきたい。

第1に、神楽という儀式が祭儀と演劇という両面から事細かく説明されている点がある。周知のように、神楽は神社の祭儀として始まったものの、明治維新によって一大改革を迫られ、神職によって伝承されていた神楽は、一般市民によって舞われることになった。これによって、祭祀・神事よりも娯楽性が重視される時代に突入したのである。そして、さらに大きな変革の波が訪れたのは、1970年の大阪万博博覧会の公演で、それまで郷土でのみ上演されていた神楽が、大きなステージで上演されることにより、ショーとしての工夫が大幅に取り入れられるようになったのである。つまり、現在の神楽は、歌舞伎などの日本伝統芸術が歩んできた世俗的な劇化の道を辿りつつあり、本来の祭儀という意識が徐々に薄れているという事実は否めないのである。しかし、著者は敢えて「祭儀と演行とは何なのか」という根本的な疑問から神楽に近づくという正攻法を取っている。つまり、神道という概念から出発し、神楽の実態まで辿っていく過程で日本の神楽の持つ真の意味を追求しているのである。

第2に、「神楽は日本独自の芸能」という偏狭な考え方、捉え方から脱し、神楽という研究テーマの脱日本化の重要性を指摘している点がある。これまでの神楽研究史を概観してみると、神楽の起源は、日本の古典である『古事記』及び『日本書紀』の中で、天照大御神が天の岩屋戸に姿を隠した際、天宇受売命が天の岩屋戸の前で神懸かりとなって舞い踊ったとされる神話が定説となっている。また、芸能にあってもこの神話が起源といわれ、シャーマンとしての天宇受売命の憑霊現象が芸能のルーツというわけである。しかし、神楽の起源を解く鍵を中国や韓国の民族から探し出し、神楽と類似した各国の芸能とに共通点があるとの説明は、評者には目を見張る新鮮さがあった。そして、神楽と類似した各国の芸能の紹介にとどまらず、神道という上位概念を積極的に取り入れることによって、(多少一般論的な考察ではあるが)宗教的な考察まで及んでいる。ただ、入門書という本の性格を意識したためか、その比較が多少強引で飛躍的な面もあるが、神楽を東アジアの民族芸術とい

う立場を重視する見方は興味深く、神楽研究に新たな視座を提供するものとして注目されよう。

第3に、日本神楽研究史の中で主流ではなかった中国地方の神楽について実践的な分析に目を向けた点がある。著者も指摘しているように、これまでの神楽研究の上では、出雲流神楽(石見神楽)を除いた中国地方の神楽はそれほど重視されてこなかった。しかし、著者は広島県の荒神神楽や神代神楽、阿刀神楽、山口県の行波神楽、島根県の市山神楽、岡山県の備中神楽といった中国地方の神楽について積極的に取り上げている。これら中国地方の神楽は、御座を清めるための採物舞と神話や神社縁起を劇化した神能などから成り、この流れを汲んだうえで演劇性を高めた神楽が中国地方中心に全国へ広がったもので、特に島根県西部や広島県北西部に伝わる神楽流は、子供にも人気のある娯楽芸能として確立されている(この娯楽性のためなのか、神楽を専門的に公演する神楽団の数は広島県だけで60に上る)。つまり、辺境にあった中国地方の神楽の源流の考察とフィールドから得られたその具体的な様子を追求した本書の分析は高く評価できよう。

以上のような本書の特筆すべき所もあるものの、残念ながら評者の期待に少し及ばなかった点があるのも事実である。以下では、それらについて論ずる。

第1に、日本の神楽、中国の儺戯、韓国のタルチュムといった一連の芸能が本当に共通した思想から生まれたのかとの思いが、筆者の慎重な考察や言及があるにもかかわらず、なお払拭できない点である。祭儀の過程から演劇性が生まれ、仮面による演行が行われるというプロセスは日中韓で見事に一致している。しかし著者も指摘しているように、祭儀の流れで演劇が、そしてそこから脱人間の象徴である仮面が登場するのは、世界にも数多くの例が見られる。ところが、本書では日本の神楽、中国の儺戯、韓国のタルチュムについての紹介はあるものの、三者の具体的な比較・考察にまでは至っていない、との思いを禁じ得なかった。これは入門書という本書の性格を考えると、初めて神楽という芸能に接した読者には論理の飛躍を起こされる恐れさえあると思われる。

第2に、神道から神社へ、また神社から神楽へのプロセスへの架橋に、あまり成功しているように思えなかった点である。論議の流れ上、第5章は神道から神社へと続いてきた第一部の議論のまとめ、第14章は神楽の実例から見られた神楽の意義などの役割を担うべきである。評者もそのようなストーリーを期待して読みすすめていったわけだが、その期待が十分満たされたとの気持ちを持つことはできなかった。第5章の古表神社と人形戯では、古表神社で行われる芸能と中国の角抵戯や韓国の悼二將歌の人形劇との近似性が紹介される等、興味深い。ただ、第1部のまとめとの部分は多少突飛で、少なくとも第1部の成果に言及されてもよかったのではないか、との思いを禁じ得なかった。そして、第14章でも厳島神社の舞台空間と芸能が紹介されているが、具体的な神楽についての考察が殆ど見られず、第6章で言及された「舞台空間と演行」の実例に過ぎないとの印象を受けた。

しかし、このような多少の問題はあるものの、本書の持つ価値は変わらないものがあると思う。

最後に、素材となる神楽に関する多様な情報を持つ優れた一冊の本として完成しているこのようなフィールドからの情報こそが、民俗学研究の可能性であったり妙味であったりするのかもしれないという点も、本書から受けた印象としてつけ加えておきたい。